

# 大分県現代俳句協会句会報

## 第21号

令和4年12月31日発行

【令和4年自薦作品結果号】

### 令和四年自薦作品結果発表（高得点句）

13点 名月に母を還してよりの黙

足立 攝

《10点》  
のりしろでつぎ足す命髪洗う  
岸本千鶴子  
藪飯の湯気にちちはは降臨す  
河野 輝暉  
子に逝かれ萩にも散られ忘れ鎌  
河野 輝暉  
バス停の女が褪せてゆく残暑  
神 慶子

12点 稲刈を終えた空から透きとおる

足立 攝

《8点》  
ひまわりを咲かせて戦争を見ておりぬ

11点 ほろほろと故郷をこぼす蓼の花

菅 攝子

《9点》  
冬青空人の祈りが満ちている  
足立 町子  
《8点》  
どんぐりの林の中に鬼がいる  
宮川三保子  
かなしいほど鶴見る老々介護かな  
衛藤 俊一  
死ぬために生きた二十歳の秋螢  
有村 王志  
うららかや手帳に挟む水の音  
下司 正昭  
白玉やつるりつるりと健忘症  
本田 圭子  
時松由美子

11点 脱皮の蛇途中をだれも見えない

有村 王志

《7点》

11点 秋天にあしたを預け深呼吸

甲斐加代子

《7点》  
過疎の村案山子が人を目立たす  
甲斐 素純  
たましいが口から漏れて冬銀河  
足立 町子  
捺印を逆さに押して晩夏光  
河野 則子  
過去の翳落とす棚田の稲を刈る  
上田たかし  
老人を詩人に変える秋の空  
小野みち子  
名月の下にもいくさする人ら  
坂本 一光  
どちらかが突き放したか流れ星  
佐藤 珠幸

《6点》

影のあるものが吼える後の月 足立 攝  
 眠る師のあたたかくあり石路の花 足立 町子  
 プリントが破れる程に消して夏 本田 圭子  
 野の花を摘むことをやめ合掌す 河野 則子  
 これからは余生と決めて春炬燵 御手洗豊海  
 無花果や与えるだけが愛じゃない 陣野千恵子  
 早蕨や一代きりの開拓史 福田 英子

《5点》

自撮り棒ぬつと突き出る鯨日和 足立 攝  
 ごみ出しやマスクで隠す朝の顔 河野 則子  
 俎に葱の香残し出勤す 河野 則子  
 透きとおる童の歌や天高し 菅 勲  
 名月に主役を譲る天守閣 岡村 君香  
 向日葵のむこうに戦争未亡人 鎌倉真由美  
 秋灯下きれいな嘘を重ねゆく 上田たかし  
 平和論説いてさんまの客でいる 上田たかし  
 団栗を踏まねば行けぬ道具小屋 吉田 素子  
 十二月八日両手につつま膝がしら 白土 正江

《4点》

ゲルニカはピカソの叫び日輪草 宮川三保子  
 海原を結んでひらく秋の蝶 岸本千鶴子  
 ひとり言家電に云わせ日向ぼこ 岸本千鶴子  
 開墾の父を眠らす冬の雨 足立 町子  
 シベリアの凍土の墓碑は祖国向き 下司 正昭  
 裸婦像は恥じらいみせて秋桜 下司 正昭  
 秋刀魚焼く煙の中の一人かな 小川 良子  
 精米のコイン落つ音鳥雲に 河野 輝暉  
 柿食えば空也の瘦もわれのうち 河野 輝暉

核の灰どこへ夏のブーメラン 瀬川 剛一  
 行く秋を軽トラで追う男達 鎌倉真由美  
 朝な夕な見ているだけの柿落ちる 鎌倉真由美  
 受け流すことも大切猫じやらし 佐々木 玉  
 生涯は長し短し菊香る 甲斐 順子  
 とろとろと燃える火の色柿の色 甲斐 順子  
 シンブルの豊かな心むかご飯 甲斐 順子  
 麦嵐焦土にいのち軋み合う 田中 充  
 川底に落ちて浮かばぬ落葉あり 福田スミ子  
 この街の見える範囲はみな残暑 足立 鶴男  
 眼裏に少しだけある秋の鬱 平田千代子

《3点》

透明な世界は自由金魚たち 菅 登貴子  
 稗取らむ老いと仲良く田を継いで 甲斐 素純  
 ビタミンの赤白黄色チューリップ 岸本千鶴子  
 片陰出て二足歩行にまた戻る 有村 王志  
 墓じまいしている古里秋彼岸 灘波 瑞枝  
 戻り来い蜜柑受粉の頃会はむ 福田 英子  
 人間も所領の内か冬とんび 岡野 紘宣  
 新蕎麦を九十五歳の腕力<sup>てんか</sup> 早澤まり子  
 表札は亡き夫のまま注連飾り 早澤まり子  
 今少し生きられるかと星数え 早澤まり子  
 一つづつ心の闇を捨て遍路 菅 勲  
 天皇のエンゲル係数室の花 瀬川 剛一  
 栗めしを握る十指や八十路越え 甲斐加代子  
 行く秋のつぶやき投げるせせらぎに 甲斐加代子  
 美しい命生き抜け冬苺 赤峰佐代子  
 夏つばめ空を大きく使ふなり 西峯 峰子  
 秋の蝶母は昼夜の時失くす 西峯 峰子  
 秋刀魚焼く色をなくした空の端 佐藤 珠幸

《2点》

生きているハイビスカスの長き舌 白土 正江  
 捩花や素直になれぬこと多し 佐々木 玉  
 念力のかかった樹より紅葉す 吉田 素子  
 千枚田稲刈り終えてより主の顔 赤嶺 信子  
 翹雲まだ晩成に届かざる 飯田 幸子  
 蝉の声いれてオムレツふんわりと 時松由美子  
 新米をまずは我が家の暴君へ 平田千代子  
 ベランダに夏の思い出干しておく 陣野千恵子  
 秋の蝶毒持つ草の蜜も吸ふ 福田スミ子  
 二冊目の句帳はホタルで締めくくる 本田 圭子

物忘れ進む恐怖やそぞろ寒 宮川三保子  
 雛の眼に映る憂き世の美しき 菅 攝子  
 デパ地下に初夏の愁いを持ち歩く 菅 攝子  
 初盆に消しゆく人の住所録 大神 愛子  
 梅雨空に姪は旅立つ黄泉の国 大神 愛子  
 彼岸入りいなりの味が母に似て 大神 愛子  
 二人して六十四年春田打つ 灘波 瑞枝  
 朝顔の日ごと小さく母偲ぶ 安森 範明  
 寒村の今年かぎりか青田風 菅 勲  
 稲刈りを見ているだけの母の背よ 岡村 君香  
 腰おもき夫をさそつて望の月 安田 文  
 自然薯の切れないねばり父の鍬 甲斐加代子  
 愚かなる考える葦秋に入る 坂本 一光  
 野葡萄の終の覚悟を垣間見る 坂本 一光  
 死ぬことは生きることだと草紅葉 坂本 一光  
 赤子泣く村に久久菊日和 赤峰佐代子  
 放り込まれ紅葉舞う音MRI 林 香澄  
 遠回りすればそこにも秋の風 佐藤 珠幸

星飛んで「いいね」が地球這い回る

園田 武子

神楽面はずし素顔の人となり

御手洗豊海

どんぐりの残像追っている鼓動

上田たかし

ぐつすりの夢に夢中の夜長かな

甲斐 順子

老いも死も美しきかな真夜の露

吉田 素子

うたかたの言葉を掬う花野道

田中 充

くぐり戸の灯のやわらかし十三夜

田中 充

去年より少し小振りの秋刀魚買う

稲田久美子

稲刈に鎌がいらない世になりて

児玉 利子

どんぐりの帰るところは紙芝居

児玉 利子

秋灯の音なき世界へ迷い込む

赤嶺 信子

胸中の炎が褪せてゆく晩秋

飯田 幸子

赤い羽根つけて福祉の灯をともし

佐藤 哲夫

白檀の形見の扇子ははの風

時松由美子

黙した日これでいいかと地虫鳴く

福田スミ子

柿ばくだん野仏の顔さけて落つ

福田スミ子

冬の蜂背骨の曲がりたる父と

幸谷 恵子

他愛なく老いて候ふ春灯

瀬川 剛一

# 令和四年自薦作品集(点盛)

宮川三保子

1 ⑧ひまわりを咲かせて戦争を見ておりぬ

2 ④ゲルニカはピカソの叫び日輪草

3 ②物忘れ進む恐怖やそぞろ寒

4 人の世は夢幻の如し雪の華

菅 攝子

5 ②雛の眼に映る憂き世の美しき

6 ⑪ほろほろと故郷をこぼす蓼の花

7 ②デパ地下に初夏の愁いを持ち歩く

8 ①小蟹群れ淋しき夕日来て甘ゆ

衛藤 俊一

9 コスモスと隠れんぼする駅舎塀

10 あてもなく記憶頼りに紅葉の湯

11 ⑧どんぐりの林の中に鬼がいる

12 ①雨樋にひっそり昏れる柿紅葉

菅 登貴子

13 ③透明な世界は自由金魚たち

14 ①パステル画描きて野ばらは音楽に

15 ①ロシアにも休刊日あり夏の月

16 ①母の日へ福を授けし服選び

17 ⑦過疎の村案山子が人を目立たす

18 ③稗取らむ老いと仲良く田を継いで

19 ①戦国の怨念未だ曼珠沙華

20 振り売りの古都の夏来る鴨の川

21 ⑬名月に母を還してよりの黙

22 ⑫稲刈を終えた空から透きとおる

23 ⑤自撮り棒ぬつと突き出る鯨日和

24 ⑥影のあるものらが吼える後の月

25 ②初盆に消しゆく人の住所録

26 ②梅雨空に姪は旅立つ黄泉の国

27 生るる事茨の道のくりかえし

28 ②彼岸入りいなりの味が母に似て

29 ③ビタミンの赤白黄色チューリップ

30 ⑩のりしろでつぎ足す命髪洗う

31 ④海原を結んでひらく秋の蝶

32 ④ひとり言家電に云わせ日向ぼこ

33 ⑧かなしいほど鶴見る老々介護かな

有村 王志

34 ①緑陰やいまも主役はゼレンスキー

町子

35 ③片陰出て二足歩行にまた戻る

足立

36 ⑪脱皮の蛇途中をだれも見えない

足立 町子

37 ⑦たましいが口から漏れて冬銀河

足立 町子

38 ④開墾の父を眠らす冬の雨

足立 町子

39 ⑨冬青空人の祈りが満ちている

足立 町子

40 ⑥眠る師のあたたかくあり石露の花

灘波 瑞枝

41 ②二人して六十四年春田打つ

灘波 瑞枝

42 ①死に仕度一つを片付け古日記

灘波 瑞枝

43 ③墓じまいしている古里秋彼岸

灘波 瑞枝

44 ①草の花草には草の生命あり

福田 英子

45 ⑥早蕨や一代きりの開拓史

福田 英子

46 黄泉路にもきつと俳句を葉月尽

福田 英子

47 密柑山に座りて海に漕手逝くや

福田 英子

48 ③戻り来い蜜柑受粉の頃はむ

福田 英子

49 ⑧死ぬために生きた二十歳の秋蟹

下司 正昭

50 ④シベリアの凍土の墓碑は祖国向き

下司 正昭

51 無言館のドラマに涙虫の秋

下司 正昭

52 ④裸婦像は恥じらいみせて秋桜

下司 正昭

- 53 ①娘より買ひ物誘ふ秋の雨 安森 範明
- 54 ②朝顔の日ごと小さく母偲ぶ
- 55 風鈴や俳句色紙に刻かけて
- 56 乳飲み子のはなちようちん秋の空 加藤 征孝
- 57 落雷の朝に轟めく雲は黒
- 58 コンバインさわやかに吹くりズム
- 59 稲刈のバック音に流れる汗
- 60 ①彼岸花想い出の地は帰らない 岡野 紘宣
- 61 ①山ぶどう酸っぱき故郷はダムの中
- 62 CDの穴の細さや夜半の冬
- 63 ③人間も所領の内か冬とんび
- 64 言ひ負けていつまで続く松手入 本田 圭子
- 65 ⑧うららかや手帳に挟む水の音
- 66 ⑥プリントが破れる程に消して夏
- 67 ③二冊目の句帳はホタルで締めくくる
- 68 夏の月手紙一通書き終えて 神 慶子
- 69 ⑩バス停の女が褪せてゆく残暑
- 70 羽黒とんぼの逡巡しては日が暮れる
- 71 ①新涼の女きれいになってゆく
- 72 ①ゆきずりの人と良夜を称えあう 小川 良子
- 73 ①鬼灯を鳴らした昭和懐しむ
- 74 コスモスの香り漂う亡父の家
- 75 母の背が苦勞を語る曼珠沙華
- 76 ④秋刀魚焼く煙の中の一人かな 早澤まり子
- 77 枯木立寄贈者の木札ついたまま
- 78 ③新蕎麦を九十五歳の腕力
- 79 ③表札は亡き夫のまま注連飾り
- 80 ③今少し生きられるかと星数え 河野 輝暉
- 81 ④精米のコイン落つ音鳥雲に
- 82 ⑩蕎麦の湯気にちちは降臨す
- 83 ⑩子に逝かれ萩にも散られ忘れ鎌
- 84 ④柿食べば空也の瘦もわれのうち 河野 則子
- 85 ⑦捺印を逆さに押して晩夏光
- 86 ⑤ごみ出しやマスクで隠す朝の顔
- 87 ⑥野の花を摘むことをやめ合掌す
- 88 ⑤俎に葱の香残し出勤す 安部ユリ子
- 89 ①夏木立メジャーの目盛メタボ「H」
- 90 連発に息のむ火花ガラスごし
- 91 ドローンを子に操らせ稲の波
- 92 ①明月をお盆に載せてミニ宴 菅 勲
- 93 ①虹立ちて一人寝の村ゆりおこす
- 94 ③一つづつ心の闇を捨て遍路
- 95 ②寒村の今年かぎりか青田風
- 96 ⑤透きとおる童の歌や天高し 岡村 君香
- 97 ①柔軟剤変えて心も秋に入る
- 98 ⑤名月に主役を譲る天守閣
- 99 ②稲刈りを見ているだけの母の背よ
- 100 青天やいつもの場所に金木犀 安田 文
- 101 盆太鼓三年ぶりの踊りの輪
- 102 ①彩りが重なりあつて秋の山
- 103 ①池に鯉水面に映るうろこ雲
- 104 ②腰おもき夫をさそつて望の月 瀬川 剛一
- 105 ②他愛なく老いて候ふ春灯
- 106 ④核の灰どこへ夏のブルーメラン
- 107 ①坊がつる湿原しんしんアルタイル
- 108 ③天皇のエンゲル係数室の花 井上 則子
- 109 ①声かけてひと枝空家の檀の実 漸うに彩増す山に鳶の舞う
- 110 水澄みて群遊る小魚の
- 111 菊の香に背筋伸ばして一步前
- 112 栗めしを握る十指や八十路越え
- 113 ③行く秋のつぶやき投げせるせせらぎに
- 114 ②自然薯の切れないねばり父の鍬
- 115 ①秋天にあしたを預け深呼吸
- 116 ⑦名月の下にもいくさする人ら
- 117 ②愚かなる考える葦秋に入る
- 118 ②野葡萄の終の覚悟を垣間見る
- 119 ②死ぬことは生きることだと草紅葉
- 120 ②死ぬことは生きることだと草紅葉 赤峰佐代子
- 121 ①人間に戻ろう九重の秋一步
- 122 ③美しい命生き抜け冬毒
- 123 ①無駄口の減らない女や秋暑し
- 124 ②赤子泣く村に久久菊日和 林 香澄
- 125 ②放り込まれ紅葉舞う音MRI
- 126 ピーマン尽くし無口な夫の鼻青み
- 127 白月や剥き身の貝の海渡る
- 128 ①若尾花振り返りなどしておらぬ

- 153 ③ 生きているハイビスカスの長き舌  
白土 正江
- 152 ⑤ 平和論説いてさんまの客でいる  
白土 正江
- 151 ⑦ 過去の翳落とす棚田の稲を刈る
- 150 ② どんぐりの残像追っている鼓動
- 149 ⑤ 秋灯下きれいな嘘を重ねゆく  
上田たかし
- 148 ④ 朝な夕な見ているだけの柿落ちる  
急ぐ秋告白はまだまだなのよ
- 147 ④ 行く秋を軽トラで追う男達  
上田たかし
- 146 ⑤ 向日葵のむこうに戦争未亡人
- 145 ④ 行く秋を軽トラで追う男達  
鎌倉真由美
- 144 ① 今日生きてあしたはありや冬の蝶  
鎌倉真由美
- 143 ② 神楽面はずし素顔の人となり
- 142 ⑥ これからは余生と決めて春炬燵  
恋愛も別れもありて遠花火
- 141 ② 神楽面はずし素顔の人となり  
御手洗豊海
- 140 ① それ以上問いつめないで桑いちご
- 139 ① 破れ芭蕉ドミノ倒しの温暖化  
園田 武子
- 138 ② 星飛んで「いいね」が地球這い回る
- 137 ① 新米や飯大盛りの安全靴  
園田 武子
- 136 ① 龍淵に私の弱さ潜みおり
- 135 ② 遠回りすればそこにも秋の風
- 134 ③ 秋刀魚焼く色をなくした空の端
- 133 ⑦ どちらかが突き放したか流れ星  
佐藤 珠幸
- 132 ① 罌雲十七文字の暮らしあり
- 131 ① 夕暮れは蓑虫の蓑ほころびぬ
- 130 ③ 秋の蝶母は昼夜の時失くす
- 129 ③ 夏つばめ空を大きく使ふなり  
西峯 峰子
- 179 ① 旧友が来てそれぞれの秋日和  
来るべき刻を知らせる秋あかね
- 178 ⑦ 老人を詩人に変える秋の空
- 177 ① 旧友が来てそれぞれの秋日和
- 176 ① コスモスをリュックに刺して山ガール  
名月を背にして団子食べる夫  
小野みち子
- 175 ② 去年より少し小振りの秋刀魚買う  
秋灯が青ざめた吾を写し出す
- 174 ② 去年より少し小振りの秋刀魚買う  
稲田久美子
- 173 ② ぐぐり戸の灯のやわらかし十三夜  
地球儀の汚点を拭う白木蓮
- 172 ② ぐぐり戸の灯のやわらかし十三夜  
田中 充
- 171 ② うたかたの言葉を掬う花野道
- 170 ④ 麦嵐焦土にいのち軋み合う
- 169 ④ 麦嵐焦土にいのち軋み合う
- 168 ② 老いも死も美しきかな真夜の露  
田中 充
- 167 ③ 念力のかかった樹より紅葉す
- 166 ⑤ 団栗を踏まねば行けぬ道具小屋
- 165 ① 昔とはどこかが違ふ秋刀魚食む  
吉田 素子
- 164 ④ シンプルの豊かな心むかご飯
- 163 ② ぐつすりの夢に夢中の夜長かな
- 162 ④ とろとろと燃える火の色柿の色
- 161 ④ 生涯は長し短し菊香る  
甲斐 順子
- 160 ③ 振花や素直になれぬこと多し
- 159 ① はかりごと考えている小判草
- 158 ④ 受け流すことも大切猫じゃらし  
首筋を撫でる秋風閣魔堂
- 157 ④ 受け流すことも大切猫じゃらし
- 156 ⑤ 十二月八日両手につつむ膝がしら  
佐々木 玉
- 155 ⑦ 七回忌父の竿出す鯊の秋
- 154 ① 私の目は節穴でした敗戦忌
- 180 ① こんな夜は母の遺せし糸瓜水  
児玉 利子
- 181 ② 秋灯に日々の重さを思いしる
- 182 ② 稲刈に鎌がいらぬ世になりて
- 183 ② どんぐりの帰るところは紙芝居  
落ちてきた紅葉何だか棄てがたい  
赤嶺 信子
- 184 ② どんぐりの帰るところは紙芝居
- 187 ① 稲刈りや家族総出の日の遠く
- 186 ② 秋灯の音なき世界へ迷い込む
- 185 ① 紅葉の大パノラマに声枯らす
- 188 ③ 千枚田稲刈り終えてより主の顔  
飯田 幸子
- 189 ③ 罌雲まだ晩成に届かざる  
うつむいた日々楓の色づけり
- 190 ③ 罌雲まだ晩成に届かざる
- 191 ② 胸中の炎が褪せてゆく晩秋  
他人井食べるふたりや今日から秋  
佐藤 哲夫
- 192 ② 胸中の炎が褪せてゆく晩秋
- 193 ② 赤い羽根つけて福祉の灯をともし
- 194 ② 赤い羽根つけて福祉の灯をともし
- 195 ② 赤い羽根つけて福祉の灯をともし
- 196 ① 三年目のコロナに耐える案山子たち  
時松由美子
- 198 ③ 蝉の声いれてオムレツふんわりと
- 199 ② 白檀の形見の扇子ははの風
- 200 ⑧ 白玉やつるりつるりと健忘症  
亡夫のくせ思い出させし木の葉髪  
平田千代子
- 201 ④ 眼裏に少しだけある秋の鬱  
夕月へ子どもがキックするボール
- 202 ③ 新米をまずは我が家の暴君へ  
この花野毛羽立つように揺れており

陣野千恵子

- 205 ①百日草君の隣にずっといる
- 206 ⑥無花果や与えるだけが愛じやない
- 207 ③ペランダに夏の思い出干しておく
- 208 ①つぎの世へ羽根を広げる鳶紅葉

福田スミ子

- 209 ④川底に落ちて浮かばぬ落葉あり
- 210 ②黙した日これでいいかと地虫鳴く
- 211 ③秋の蝶毒持つ草の蜜も吸ふ
- 212 ②柿ばくだん野仏の顔さけて落つ

足立 鶴男

- 213 ①一句詠み一句棄てたる秋彼岸
- 214 ④この街の見える範囲はみな残暑
- 215 腰痛も少しやわらぎ九月来る
- 216 ①秋風は大事な人もすり抜ける

幸谷 恵子

- 217 ②冬の蜂背骨の曲がりたる父と
- 218 ①冬菫前へ前へと夫の足
- 219 ①小春日を連れて阿修羅で再会す
- 220 正倉院見て春愁を閉じこめる

# 令和四年自薦作品集(選句&選評)

井元 扇岳 選

- 【 6、17、30、40、61、82、94、161、196、206 】

吾亦 紅 選

- 【 7、15、23、30、37、84、133、145、166、170 】

河野 則子 選

- 【 6、17、30、38、45、63、92、103、134、152 】

(岸本千鶴子)

黒髪は女の命とよく耳にします。でも晩年になり梳く度に白く少なくなつた髪をていねいに洗う姿。この姿は同時に、知人のやつと書いてある乱れた文までを連想。今や乏しくなつた命ののりしろでもあろう。心に沁みる諸行無常の深い読みの秀句と思います。

菅 攝子 選

- 【 11、16、29、49、65、71、82、87、141、149 】

河野 輝暉 選

- 【 1、18、37、52、69、76、133、147、164、206 】

(鎌倉真由美)

イントロを神威賛仰の響きにさせておいて、下五は落胆に落ちる意に。またぞろ昔話だが、酸葉、茅花、野苺、通草など山野に子供達の御馳走があり、柿などは最高のお八つだった。柿は早目にとつて干柿にも。今は落ちるにまかせ当り年なのに鳥もふり向かない。少子化の子供達は多忙なのだ。暇を惜んでは屋内でインターネットに現を抜かし視力まで落ちていく。中七に、単なるノスタルジイか、時代批判なのかを読者に突きつけている様だ。

宮川三保子 選

- 【 21、25、33、41、50、82、139、178、188、209 】

82 諸飯の湯気にちちはは降臨す

(河野 輝暉)

永松左世美 選

- 【 5、22、35、69、86、89、129、143、164、218 】

5 雛の眼に映る憂き世の美しき

(菅 攝子)

雛様がまっすぐ見つめるこのせちがらい世の

戦時中、お腹をすかせていても食事はイモやカボチャが多かつたです。良く生きてきたなあーと思います。

現代の贅沢三昧の飲食を思うと、あらためて昭和の時代を思い起こします。諸飯を食しながら、お父様、お母様のことが話題になったことでしょう。

菅 登貴子 選

- 【 6、31、84、87、97、117、129、152、182、206 】

岡野 紘宣 選

- 【 31、36、45、66、78、88、95、129、199、212 】

牧野 桂一 選

- 【 2、11、22、36、37、85、108、117、153、192 】

117 名月の下にもいくさする人ら (坂本 一光)

名月の下でいくさをする人。「名月」も変らないもの。「いくさをする人」も人間の歴史以来変らない。悲しい性というより外ない。アインシュタインはフロイトに、「人の世に戦争はなくなるだろうか」と問うたが、答は「否」。人間の男は父親殺しの本性をもっているからという。一つの意見のようにもみえるが、「名月」でこの句は俳句になった。

中。すんだ眼で美しいと感じる作者の心持ちが  
すてきです。

### 大神 愛子 選

- 【3、17、22、39、43、53、69、83、113、172】  
43 墓じまいしている古里秋彼岸

(灘波 瑞枝)

どこの墓地も、墓じまいが多くサラ地になっ  
ていて、そこはもう我が物顔の草ぼうぼう状態  
です。作者の投句を読んで、これがふる里の現  
状だろうと感じた。それでも彼岸にお花を持っ  
て参った優しさがにじんで伝わる句です。

### 田代 直之 選

- 【6、22、30、54、66、69、82、146、151、156】

### 甲斐 順子 選

- 【2、18、22、29、33、37、82、116、124、199】  
116 秋天にあしたを預け深呼吸

(甲斐加代子)

なんと気持のいい句でしょう。澄みきつた広  
い秋の空、人の世のいろいろはいつもの事で、  
明日は明日の風に添って……秋天の大きな気を  
深呼吸するとは……。

### 安部ユリ子 選

- 【6、86、96、98、116、132、138、164、172、189】  
98 名月に主役を譲る天守閣

(岡村 君香)

名月に主役を譲るといふ句に感動しました。  
井の中の蛙にならず、ちよつとした心くばりが  
人の心をなごませる、そんな作者を思い浮かべ

ました。

私も未熟者ですが、こんな句が書ける様にな  
りたいと思います。

### 瀬川 剛一 選

- 【1、11、23、33、40、67、81】

### 原田 勝子 選

- 【18、23、36、83、86、109、114、125、198、219】  
114 行く秋のつぶやき投げるせせらぎに

(甲斐加代子)

春夏秋冬によって川のせせらぎの音も違うの  
でしょう。強弱静寂早い遅い作者の呟きを投げ  
るといふ動作に感銘しました。秋のせせらぎの  
音は流れも早いのでしょう。嬉しい事も、嫌な  
事も作者の色んな思ひも投げる事で早く忘れて、  
ひとときの呟きで心もすつきりするのではと感  
じました。

### 加藤 征孝 選

- 【3、24、33、41、82、88、108、131、163、188】  
3、物忘れ進む恐怖やそぞろ寒

(宮川三保子)

最近とくに物を忘れて、今考えたことも忘れ  
て、何だったんだろうかと思う。そして考へ直  
すと、なかなか出てこない。何だったんだらう  
かと思う。そのうち思い出して、認知症かと思  
うと、それは違うという。何度か訪ねて来てく  
れる妹が言うには、それはたんなる物忘れだと  
言う。姉も認知症が進んでるのだと言う。確か  
に私の場合は、物忘れなのか？一人暮らしの関  
係上何事も思えば思う程出てこない。

### 岸本千鶴子 選

- 【14、24、36、45、52、65、69、81、85、167】

### 福田 英子 選

- 【1、24、30、31、63、81、99、104、166、183】  
30 のりしろでつぎ足す命髪洗う

(岸本千鶴子)

ある年齢になると、自ずと「命」と向き合う  
のではないだろうか。それはまさに「のりしろ」。  
言い当てて妙で、ひたすら感動しました。

### 西峯 峰子 選

- 【6、30、80、116、135、141、160、169、199、210】

### 林 香澄 選

- 【17、21、37、48、104、133、149、161、162、199】  
149 秋灯下きれいな嘘を重ねゆく

(上田たかし)

幼き日、嘘をつくのは泥棒の始まりと脅され、  
しばらくすると、嘘も方便と習い、年を経てき  
れいな嘘が有ると……。なる程と、大人の私は  
肯けるので、この句を選びました。

### 下司 正昭 選

- 【1、34、54、106、118、145、149、150、151、152】

### 早澤まり子 選

- 【25、33、40、43、66、82、120、151、178、203】  
82 諸飯の湯気にちちはは降臨す

(河野 輝暉)

この句の諸はさつまいもの事かと思えます。  
なつかしい諸飯のことばのひびき。子供の頃

は、毎日食べていました。いえ、食べさせられたと言う方が正しいと思います。今では、蕎麦はちよつとしたグルメとして紹介されたりします。お蕎麦のほのかな甘いかおりに、御両親がなつかしく、おいでになられたのでしょうか。郷愁にひたり今夜は我が家も蕎麦を炊きましょうか。

小川 良子 選

【21、26、86、96、115、173、186、195、209、217】  
86 ごみ出しやマスクで隠す朝の顔  
(河野 則子)

ごみ出しの時化粧をせず素颜でいるので、ついついマスクで顔を隠してしまう心情がよく伝わります。

灘波 瑞枝 選

【1、21、36、50、76、83、116、124、167、199】

神 慶子 選

【23、33、39、66、83、85、145、149、179、201】

坂本 一光 選

【5、17、22、36、39、147、149、156、160、214】  
39 冬青空人の祈りが満ちている  
(足立 町子)

冬の青空を見て人の祈りが満ちていると詠う感性にひかれた。どんな祈りを見たのだろう、勝手な思いがふくらんだ。ウクライナの若い女性俳人は「うつくしき空より飛来ロケット我らに」と詠った(ETV特集「戦禍の中のHAIKU」)。大分川柳の祖・風柳に「若し口がきけたら海も空も怒る」があり、私は「この空も海もウクライナへ続く」と返した。我が物顔の米軍機を

見れば「誰が空ぞこは誰が海ぞ誰が土地ぞ辺野古・普天間我らがものぞ」と思う。「戦争も平和も青い空の下」のことなのだ。

山本 悦子 選

【21、35、45、65、88、99、115、147、166、178】

岡村 君香 選

【22、88、133、141、151、167、185、207、210、211】  
210 黙した日これでもいいかと地虫鳴く  
(福田スミ子)

昼間の話し合いの場では、何も言わない方が良いと思ひ沈黙を守った。しかし、夜になり寝床に入り、本当に黙っていて良かったのか、言うべきことがあったのではないかと、眠れずに悶々としている。そんな自分にもよくある情景が目につかびました。季語の「地虫鳴く」が秋の夜長の切なさや迷い・反省などのいろいろな感情を想像させていると思いました。

山口木浦木 選

【30、31、32、45、98、117、133、157、166、207】

有村 王志 選

【1、23、38、49、72、141、145、154、168、214】  
38 開墾の父を眠らす冬の雨  
(足立 町子)

戦後、全国各地で田畑の開墾が行われ、その父の背中を見て育った世代のしみじみとしたその思い。すでに故人となった父への様々な想いが交差して、しとしとと降る冷涼とした時代を超えた思いが伝わってくる。

この他では、21番の下五の鯨日和の把握が巧みで触手が動いた、また、49番の死ぬためたの作品には同世代の痛切な思いが伝わってくる。

園田 武子 選

【6、24、33、37、65、85、146、156、197、206】

小野みち子 選

【13、22、36、39、65、150、157、170、185、214】

菅 勲 選

【13、17、22、26、38、49、81、87、209】  
87 野の花を摘むことをやめ合掌す  
(河野 則子)

昭和天皇が雑草と言う野草はないと言われたとの事です。野の花を思いやる深い思いを感じました。

安森 範明 選

【28、40、49、79、82、96、123、143、157、178】  
157 受け流すことも大切猫じゃらし  
(佐々木 玉)

年を取ると気に掛かることが増えてきます。何を言われても、深呼吸をして風の如く受け流す。いやなことがあっても、気持ちを切りかえて、過去を忘れ、今を生きれば良いですね。季語の猫じゃらしが絶妙。朝日に透けて、自由気ままに、風にゆれて。作者の感性すばらしい。

平田千代子 選

【6、17、21、32、60、73、80、93、113、117】



甲斐加代子 選

【6、22、36、78、83、121、145、151、178、199】

本田 圭子 選

【22、30、39、69、79、85、116、192、201、209】

御手洗豊海 選

(13、36、76、94、120、135、157、161、211、214)

陣野千恵子 選

【21、32、36、49、69、116、119、128、133、201】

21 名月に母を還してよりの黙

(足立 攝)

名月といえは、溜息が漏れる程美しくしばらく眺めていても、時を忘れるくらい人の心を惹きつけますよね。その名月に母を還したとは、竹取物語ではありませんが、なんと素晴らしい表現！

名月を眺める度にお母さまの優しい笑顔や色々な仕草までも思い出すことでしょう。

白土 正江 選

【2、24、40、84、106、136、151、159、169、203】

203 新米をまずは我が家の暴君へ

(平田千代子)

この句を目にして「暴君？」と思いましたが、すぐ「あー夫さんのことだ」と思い、すぐユーモアのある句と思いきや思いました。このような書き方をした俳句は、はじめてでした。

普通にいえば「暴君」といえば良くない印象ですが、この句の場合はユーモラスで愛が感じられます。この季節新米というごちそうを「ま

ずは」といの一の一番にというやさしい心がとてもいいですね。

久枝 花城 選

【19、28、63、78、82、107、117、130、175、197】

78 新蕎麦を九十五歳の腕力

(早澤まり子)

つい数十年前までは、多くの家々が自宅で小麦や蕎麦を栽培し、実を粉にしうどんやソバに打って食べていた。この家では、今もそのままそれを続けているのだろう。あるいは楽しみみでしているのか。

そして、今年も高齢のおじいさんかおばあさんが名乗り出て、ソバをうちはじめた。若い者たちはその手際のおよさと腕力に感心しているばかり。人生百年時代の一つの理想像だろう。腕力、の語がよく臨場感を高めた。

赤嶺 信子 選

【6、8、52、96、98、113、140、165、183、207】

98、名月に主役を譲る天守閣

(岡村 君香)

映像が鮮明に浮かび、静寂ささえも伝わってきます。中七でいつものとは違う月の美しさに敬意をはらっているような気がします。月と天守閣と作者の並びがすばらしい。大舞台に行ってみたくまりました。自然の雄大さに歴史を思います。すっきりして心に留めたい句です。

赤峰佐代子 選

【21、35、52、87、96、116、117、130、161、199】

吉田 素子 選

【21、32、33、43、65、79、83、141、152、188】

32 ひとり言家電に云わせ日向ぼこ

(岸本千鶴子)

もうだいぶ以前の事ですが、娘の家に行きました時、突然「お風呂がわきました」という声に驚かされたことがあります。この句は家電を、おせつかいめいたひとり言と捉えたところがユーモラスです。日向ぼこが素敵で作者の表情まで浮かんできます。夜、車の運転席に座りますと「お酒を飲んで運転するのはやめましょう」と自動音声の流れ、この作者の句を思い出し苦笑しています。

井上 則子 選

【21、42、49、65、69、83、116、146、160、169】

65 うららかや手帳に挟む水の音

(本田 圭子)

水辺での吟行だったのででしょうか？手帳に挟まれたその音は「さらさら」「ちよろちよろ」？ ゆつくりと散策しながらの句作。きつと素敵な句が生まれたことでしょう。

時松由美子 選

【83、86、114、122、125、164、182、203、206、213】

田中 充 選

【6、30、66、94、116、130、138、178、189、198】

178 老人を詩人に変える秋の空

(小野みち子)

高く澄み渡った秋の空である。誰しも、普段とは違う空間に身を置いて非日常気分を味わい

たくなる。この思いは年齢を重ねても変わらな  
い。秋空に誘われて吟行に参加すれば、予測し  
なかつた句が天より降りて来る。普通の老人が  
詩人になる瞬間である。自信を得て一回り成  
長した詩人となれば、決して出不精の老人に後  
戻りすることはない。この句は平明だが平凡で  
はなく、俳句に打ち込む作者の真摯な態度が伝  
わり好感を持てる。

## 令和5年 第1回 雑詠句会

### 〈作品募集〉

※第1回雑詠句会作品を募集します。ひとり  
3句で当協会未発表のもの。当協会以外で  
あれば既発表でもかまいません。兼題等は  
ありませんので新春または冬期の作品。

※この募集を含む年2回の雑詠句会と、8月  
以降に募集の自薦作品の、一人計10句が特  
別選者による年間一句賞の対象になります。

※締切は令和5年2月10日(金)消印。  
※ハガキ、FAX、メール等でお送りくださ  
い。送り先は事務局足立まで。

※句会報20号(11月22日発行)の「自薦作品  
選句用紙」等で、投句を済まされた方は除  
きます。もし重複投句になった場合は、自  
動的に新しい方を採用します。

※ご自宅のFAXを使う場合、ローラーの吸  
い込みが悪いため二枚になってしまい、事  
務局のFAXフィルムを無駄遣いするケー  
スが多発しています。できるだけメンテナ  
ンスしたFAXをお使いください。

夢野はる香 選

【21、30、39、49、67、87、119、162、180、206】

上田たかし 選

【1、24、36、37、49、84、88、106、146、189】  
106 核の灰どこへ夏のブーメラン  
(瀬川 剛一)

ロシアとウクライナの現状を踏まえての一句  
である。核大国の暴虐的な行動に対して、強い  
憤りを訴える時事俳句だ。

核を使用すればブーメラン同様、世界の非難  
は、使用した国へ……怨憎となつて、舞い戻る  
ことを示唆している。

中村 廣光 選

【12、39、44、50、65、87、114、122、208、212】  
44 草の花草には草の生命あり  
(灘波 瑞枝)

道端の草の花でしょうか。やがては小さな実  
を結び、こぼれて土の中で冬を過ごす。温かな  
春になると芽を出して、夏には立派な草となり、  
秋になるとまた花を咲かせる。名もなく、人間  
には多分役立つことのない雑草でも、何億年と  
いう生命の歴史の先端で繁っている。進化、生  
命多様性、優劣なき生命の尊厳、崇高な宇宙の  
働きを「草の花」が象徴していると受け止めま  
した。平凡なようで深い含みのある優れた句だ  
と思いました。

丘 友子 選

【21、40、82、95、102、137、162、169、178、187】

児玉 利子 選

【1、39、48、80、83、98、105、118、147、205】

飯田 幸子 選

【21、39、45、67、69、105、117、133、156、201】  
鎌倉真由美 選

【7、22、30、66、85、108、134、152、153、199】

幸谷 恵子 選

【2、38、50、83、106、116、144、151、197、211】  
50 シベリアの凍土の墓碑は祖国向き  
(下司 正昭)

あの戦争でシベリアに抑留された人は60万人  
と言われ、6万人が命を落とすとされている。  
冬の寒さはマイナス30度以下、その中での強制  
労働の苛酷さは想像を絶する。掲句の「祖国向  
き」の言葉に日本に帰ることだけが希望であつ  
たであろう悲しみと無念さが伝わる。そして作  
者のせめてもの救いを感じる。  
抑留五年で帰国した私の父は何も語らなかつ  
たことを思い出させてくれた鎮魂の一句。

足立 町子 選

【11、48、69、76、85、134、153、162、166、217】  
217 冬の蜂背骨の曲がりたる父と  
(幸谷 恵子)

冬の蜂が活動するおだやかな庭先に私は父と  
いる。老年になって前屈姿勢がひどくなった父  
はそれでも庭の手入れは怠らない。私は縁に腰  
掛けて父の背中を見ている。こんな景でしよう  
か。父は戦争に行き、何とか生きて還ってきた

ものの、戦後の暮らしは大変だった。娘の私が一番よく知っている。母が亡くなって父はますます無口になった。父への愛情あふれる、気負いのないこの句にとっても惹かれました

### 大森 浩司 選

【29、98、116、122、141、156、163、168、173、195】

### 合田 文美 選

【5、16、27、33、37、82、84、93、116、134】  
84 柿食えば空也の瘦もわれのうち

(河野 輝暉)

六波羅蜜寺に空也上人の像がある。瘠せた空也上人の開いた口から小さな阿弥陀立像が六体現れる様は、空也上人が唱えた声が阿弥陀如来の姿に変じたとする伝承を表したもの。

なぜ作者は柿を食べたときに空也に思いを馳せたのか？ 私は枯露柿を食してみた。口から吐きだした種を見て驚いた。なんと、細長い種の形は、空也像の口から現れた仏像の姿であった。作者の慈悲深い心と口から出る言葉の重さに、自分を戒めた感動の句。

※締切に9日遅れたため集計に間に合いませんでした

### 《今回のゲスト選者の紹介》

・山本 悦子 様 (天籟通信編集長)

・山口木浦木 様 (宮崎県現代俳句協会会長)

・夢野はる香 様 (元九州俳句作家協会事務局)

・丘 友子 様 (田原千暉氏ご息女)

◆句会報20号でも述べましたが、作者名が分かっている作品に対する選句は、非常にやりにくいという意見がたくさんありました。その通りだと思えます。なぜ作者名を伏せないかというの一つには特別選者の年間一句賞の選考のためという理由があります。雑詠句会と同じ扱いでは時間的に間に合わなくなるのです。

◆しかし絶対に改善の余地がないわけではありません。二つ目の理由は「作者名の分かった作品を選ぶことは、俳句を続けていけば誰でも普通にあることなので、そのための訓練をしておく」というものです。こちらが主な理由です。

◆大分県現代俳句協会はこの自薦&雑詠句会を、各種大会や句集発行のような作品発表の場ではなく、協会内の勉強の場だと位置づけています。協会の日常活動ですから、協会員しか参加できませんし、投句料も無料です。

◆作者に付度して、いいと思わない作品を選ぶという行為は、自分自身の勉強のチャンスを得ることですし、選んだ相手に対しても失礼です。その上、付度癖が直らなくなります。

◆事務局からみていると、初心者の方は初心者特有の作品を選ぶようです。自分が自信を持って選んだ作品を、ベテランの先生方が選んでいないとしたら、それは必ず理由があります。

◆その理由を調べてください。そうすることで選句のスキルは必ず上がりますし、それは自分の作句にも反映してきます。回りの会員に聞けなかつたら事務局にお問い合わせください。必ずお返事を差し上げますし、納得できるまで質問できます。事務局はそんな質問をいつでも歓迎します。協会内の駆込み寺が事務局です。

◆田口辰郎さん、梶原千代さん、佐土原孤雁さん、井上治さん、河野泉さん、宮崎山景さん、成清正之顧問、あべまさる副会長という、県協会の頭脳とも言えるべき大切な人が相次いで亡くなり、協会の屋台骨が揺らいでいます。ベテラン会員のみなさんはご自分だけの身体ではありません。どうか御自愛ください、新人を一人前の俳人に育てる協会本来の仕事にご協力ください。また新会員のみなさんは、あなた方が協会を担っていく力であることを深く自覚して、勉強に励んでくださることを願ってやみません。



## 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)